

## 有明海水産資源回復技術確立事業\*

### タイラギ中間育成試験

大渡 功晟

有明海沿岸4県では、タイラギ資源の回復を目的として、人工種苗の移植による母貝団地造成に取り組んでいる。昨年度に引き続き、殻長約50mmまでの稚貝の中間育成については、12月頃まで福岡・長崎・佐賀の各県が熊本県へ預託することで稚貝の安定生産を図る取組を行っている。

当センターでは、生産した稚貝に加え、福岡県から提供された稚貝を用いて、県内海域および陸上水槽で殻長約50mmまでの中間育成を行ったので、その結果を報告する。



図1. 筏中間育成の様子

#### 方法

中間育成は、佐賀県藤津郡太良町沖の筏(以下、筏)および公益社団法人佐賀県玄海栽培漁業協会(以下、協会)の陸上水槽で行った。

筏では、2025年9～2026年1月の間、福岡県で生産された平均殻長6.5mmの稚貝を用いて実施した(図1)。飼育容器には、オレンジカゴ(アロン化成野菜収穫カゴ)を用い、飼育基質として玉ねぎネットにアンスラサイト(粒径2mm)を約10L入れてカゴ内に收容した。また、食害防止のため、カゴの上部をネット製のネットで覆った。飼育密度は、500個体/カゴとし、水深1.5～2.0mに設置した。飼育管理は、1週間に1～2回、飼育容器周辺の付着物を除去し、1ヵ月に一度、殻長と生残率の測定を行った。

協会では、2025年9～11月の間、当センターおよび福岡県で生産された平均殻長13.2～39.3mmの稚貝を用いて実施した(図2)。飼育はネットロンカゴ内に人工基質であるアンスラサイトを敷き、そこにタイラギ稚貝を約0.1-0.2万個/㎡になるように陸上水槽に收容した。飼育水温および塩分は外海からの取水海水を使用し、餌料は*Chaetoceros neogracile*(濃縮珪藻)を5～10万cells/mlを2回/日行った。また、1ヵ月に一度、殻長と生残率の測定を行った。



図2. 協会中間育成の様子

## 結果

筏中間育成の結果を表1、福岡県生産稚貝の成長と生残の推移を図3、協会中間育成の結果を表2、当センターおよび福岡県生産稚貝の成長と生残の推移を図4に示す。

筏中間育成の生残率については、1月28日の最終取り上げ時には、47.9%となった。成長については、開始時6.5mmであったものが、終了時52.43mmとなった。この筏中間育成で生残した718個体については、佐賀県海域の沖合に移植した。

協会中間育成の生残率については、11月10日の最終的な取り上げ時には、53.1%となった。成長については、開始時13.2~39.3mmであったものが、終了時30.1~53.1mmとなった。海水温が30℃以下で搬入を行ったため搬入直後の目立った斃死は確認されなかった。しかし、期間中に殻長50mm以上までの成長を達成できなかったため、筏で中間育成を継続中である。

表1. 筏中間育成の結果

回次	由来	中間育成期間	開始時の稚貝		終了時の稚貝		
			個体数	サイズ(mm)	個体数	サイズ(mm)	生残率
1	福岡県生産	9/16~1/28	1,500	6.5	718	52.43	47.87

表2. 協会中間育成の結果

回次	由来	中間育成期間	開始時の稚貝		終了時の稚貝(11/10)		
			個体数(個)	サイズ(mm)	個体数	サイズ(mm)	生残率(%)
1	佐賀県生産	9/29~11/10	2,093	39.3	1,457	53.1	69.6
2	福岡県生産	9/29~11/10	4,613	13.2	2,107	30.1	45.7
平均	-	-	-	-	-	-	53.1
合計	-	-	6,706	-	3,564	-	-

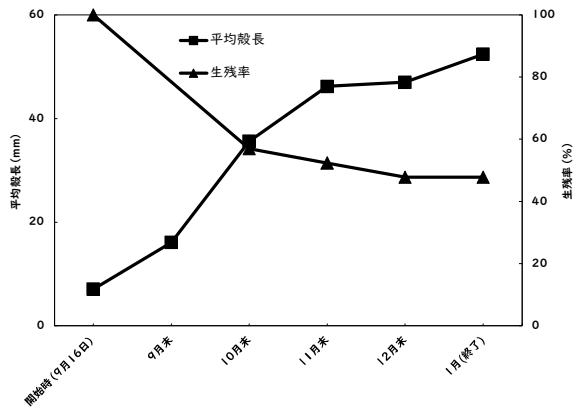


図3. 福岡県生産稚魚の成長と生残の推移

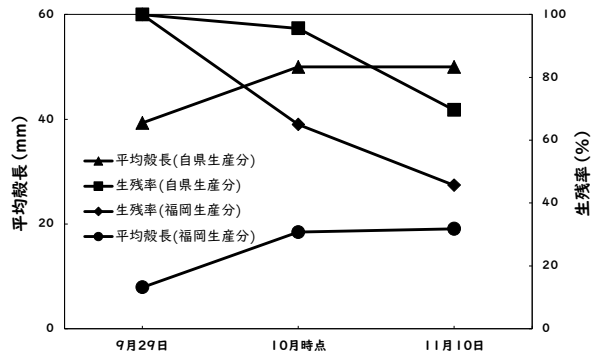


図4. 当センターおよび福岡県生産稚魚の成長と生残の推移